

令和2年度 図画工作部会研究計画

1 研究主題

豊かにかかわり つながり 自らつくりだす造形活動
—学びを生かし、表現する喜びが共に感じられる授業づくり—

2 研究主題設定にあたって

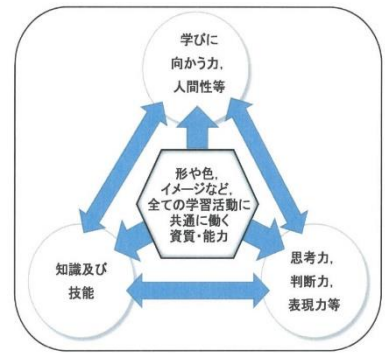
図画工作科は、自由に想像を広げることができる楽しさや、よりよい表現を求めて試行錯誤する楽しさ、思いのままに描いたりつくったりすることの面白さなどを感じ取ることでできる教科である。また、表現されたものを鑑賞する際には、感じ取る楽しさに気付き、その形や色、イメージのよさや美しさを味わうこともできる。これらの図画工作科のよさは、日々の生活の場面に結びつくことも多いので、図画工作科の学びは人生を豊かにし、形や色、イメージを通して生涯にわたって学び続ける基礎となると考える。

図画工作部会では、これまで実践してきた取組の成果を生かしつつ、新学習指導要領で示されている「三つの資質・能力」（図1）の側面から、図画工作科の指導内容を整理し、「主体的・対話的で深い学び」の趣旨を踏まえ授業改善を行い、図画工作科で身に付けさせたい資質や能力の育成に努めたいと考え取り組んできた。

その取組の中で、「豊かにかかわり つながり 自らつくりだす造形活動」の研究主題を設定し、ものをつくる活動における学びの過程を見直し、指導方法の工夫・改善を行ってきた。児童は、材料にふれた時、自分の思いをどう表現しようかと考える。表現活動では、児童同士や教師との対話により、自分の作品を見つめ直し、「つくり、つくりかえ、つくる」ことを行っている。鑑賞では、自他の作品のよさに目を向け、一人一人の試みのよさを感じ取っている。これまでこれらの児童の姿を具現化するための授業を研究し、児童の実態を把握し、実態に応じた「表現内容」、「表現材料」、「表現方法」と豊かにかかわらせることで、児童たちが表現したい思いを明確にし、その思いを実現しようと主体的に取り組んでいく授業づくりを行った。その中で、教師は、児童が材料と向き合い、創造的な技能を十分に発揮して表現し、達成感を味わうための支援の方法を模索してきた。そして、本研究主題が図画工作科における本質に迫るテーマであることが確認された。

令和元年度は、「であい つたえあい つくりだす喜びを味わう授業づくり」という副主題を掲げ研究を推進した。児童を取り巻く様々な「表現内容」、「表現材料」、「表現方法」とのであいや、感じたことを伝え合うことに重点を置き、話し合いや交流の場の設定、ワークシートの活用工夫により、自分と違った発想や表現の工夫に気付いたり、自分の表現の幅を広げたりすることにより表現の質が高まり、つくりだす喜びを味わう姿が多く見られるようになった。一方で、学校の教育目標の実現に向けて児童や地域の実態を踏まえ教育課程を編成・実施・評価し、改善を図る一連のサイクルを計画的・組織的に推進していくこと（カリキュラム・マネジメントの推進）や「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）のために、より実践的な研究をさらに深めていかななくてはならないという課題も出てきた。

そこで今年度は、研究主題を「豊かにかかわり つながり 自らつくりだす造形活動」とし、学習指導要領改訂の趣旨を踏まえた上で、カリキュラム・マネジメントの推進、アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善等に取り組んでいくための方策や研究の方向性を明らかにし、図画工作科の指導の工夫・改善を図っていくことを目指して、副主題を「学びを生かし、表現する喜びが共に感じられる授業づくり」とした。



〈図1 三つの資質・能力〉

3 研究主題についての考え方

(1) 「豊かにかかわり」とは

これまで図画工作部会では造形活動において、「表現内容」（何を）、「表現材料」（何で）、「表現方法」（どのように）の3つの要素を明確にした授業づくりに取り組んできた。表現活動では、児童が3つの要素をしっかりとつかみ、主体的な学びの実現を図ることにより、自らづくりだす活動が促されると考える。自分の表したいことが決まっている児童は、3つの要素を関連付けながら、主体的に製作に取り組んでいく。鑑賞活動では、3つの要素を基に友達の作品や親しみのある作品などを見ることで、自分なりの考えをもったり、感じ取ったりしやすくなる。このようにして感じた思いは、自分の表現活動を広げたり深めたりすることにもつながる。

大切なことは、児童自身が3つの要素と「かかわり」、自分の思いを大切にして主体的に表現や鑑賞の活動に取り組むことができるかどうかである。例えば、身近な材料は、教師によって提案された題材や「表現内容」とのかかわりによって、とっておきの「表現材料」となる。また、「表現材料」とのであいから「表現内容」が明確になる場合もある。そして、児童はつくりながら自分の思いに応える「表現方法」を見付けていく。表したいことに向かって、材料を変えてみたり、ぬり方や色を変えてみたりと、「つくる」中で「つくりかえる」が生まれる。教師が、児童の「自分はこう表したい」という表現の欲求を大切に、題材を設定したり、学習過程を計画したりし、また評価を行うことで、児童は3つの要素とより豊かにかかわり、主体的に造形活動に取り組むことができる。

(2) 「つながり」とは

活動中に交わされる教師と児童、また児童同士の対話の中で児童は、「それ、いいね。」や「どうやったの。」などの自分の表現を認めてくれる言葉に自信をもったり、ひらめきを得たりして活動に熱中していく。また、友達の表現から刺激を受け、「ああいう表現の方法もあるのか。じゃあ、こうしたらどうだろう。」など、新しい発想を生み出すこともある。このように周囲とつながり、認められたり刺激を受けたりする中で、児童は表現への意欲を高めていく。さらにグループでの話し合い等を設けることで、材料などのかかわりの中から生まれた気付きや発想を交流しながら、発想や構想の能力を高めることもできる。異学年集団で活動したり、作品を校外に展示する機会を設けたりするなど自分の周りの人たちとつながっていく場合も同様である。つながりで得られる共感や賞賛の言葉から、児童は表現することの喜びを実感することができる。

身近な「ひと」、「もの」、「こと」につなげる場を設けることで、「思った通りにできた。」「思いをうまく伝えられた。」という達成感や、「喜んでくれたので自分の表現に自信がもてた。」といった自己肯定感が高まる。また、「見てもらいたい」、「喜んでもらいたい」といった思いをもつことで、よりよいものをつくらうとする意欲の高まりも期待できる。さらに、達成感や表現の喜び、自己肯定感が、「話したい」、「聴きたい」、「話し合いたい」などの意欲を高め、言語活動の充実にもつながっていく。このように、学びの喜びを実感させ、つながりを深めていくことが、主体的に表現や鑑賞の活動へ取り組む意欲を生み、次の活動へと結び付くことになる。

(3) 「自らづくりだす」とは

図画工作科では、深い学びにつながる「見方・考え方」を「造形的な見方・考え方」と捉えている。「造形的な見方・考え方」とは、「感性や想像力を働かせて、対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと」であり、これが教科の本質といえる。

これを受けて、「自らづくりだす」とは、表現と鑑賞の活動において、児童たちが材料や作品、出来事などを形や色などの造形的な視点で捉え、そこから感じたことを基に自ら働きかけ、イメージをもちながら自分で新たな意味や価値をつくりだす創造的な活動である。作品は、自分にとっての大切なものとなったり、見る人に感動を与える存在になったりもする。また、その製作過程におい

て、自分の表現へのこだわりや作品への思い入れが強まることなども、新たな意味や価値をつくり出したといえる。「表現内容」，「表現材料」，「表現方法」の3つの要素と豊かにかかわり，「ひと」，「もの」，「こと」とつながりながら，自らが思考・判断し，自己決定をすることで自分にとっての意味や価値をつくりだすことができるのである。

(4) 「学びを生かし，表現する喜びが共に感じられる授業づくり」とは

図画工作科における深い学びを実現するために，児童が「造形的な見方・考え方」を働かせ，表現及び鑑賞に関する資質・能力を身に付けていくよう，表現と鑑賞を相互に関連させた学習の充実を図っていく。例えば，美術作品を鑑賞する中で習得した知識を自分の作品の表現に活用することができるように，学習過程や活動への提案を工夫する。すると，知識を活用するために試行錯誤が生まれ，その中で児童の思考力・判断力・表現力が発揮されていくと考えられる。その逆もまた然りである。

授業を構想するにあたっては，表現する喜びを周囲の人と共有できる学びの場や表現を発信する機会を設け，十分に表現の喜びや，その尊さを実感させていきたい。共に活動している友達から，児童は直接的・間接的に影響を受け，その表現のよさに共感したり，新たな発見をしたりすることも期待できる。また，異学年や保護者，地域住民との交流を授業づくりの際に考慮しておくこと，表現の喜びも大きくなると同時に，「造形的な見方・考え方」を広げ深めていくことにつながる。

図画工作科の「つくり，つくりかえ，つくる」は，まさにR P D C Aサイクルで回る。児童の実態・先行経験（R）⇒育成を目指す資質・能力を獲得する題材設定・めあての提示（P）⇒創造的な技能を生かした表現活動（D）⇒表現活動の振り返り，表現と鑑賞の一体化（C）⇒新たな表現活動へ（A）である。指導の在り方を常に確認し，児童一人一人が喜びを感じられるようにするために，教師は児童の表現や活動をしっかりと見取り，表現欲求に応える個に応じた指導や次の表現につながる評価を行うことが重要となる。

4 研究内容

図画工作科における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善のためには，児童一人一人が「造形的な見方・考え方」を働かせ，表現及び鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させた学習の充実を図ることが大切である。育成を目指す「三つの資質・能力」（図1）は，相互に関連し合い一体となって働くものであり，別々に分けて育成したり，順序性をもって育成したりするものではない。教師が，系統性を考慮に入れながら，その題材で育む資質・能力を見極め，本時のねらいを設定し，授業展開を工夫するために，次のことを研究していく。

(1) 「何を学ぶか」…育成する資質・能力を明確にした指導計画の作成

(カリキュラム・マネジメントの推進)

児童に育成する資質・能力を明確にした上で，これまでの経験を生かしながら資質・能力を向上させ，「造形的な見方・考え方」を働かせることができるような題材を選択・配列し，適正な評価を考慮し指導計画を作成する。その際，児童の学習意欲を高めるために発達段階に応じて，幼稚園～中学校の系統性を踏まえた学びが展開できるように工夫する。また，地域の特徴に即した題材の設定を行うことも大切である。

指導計画の作成の際には，「A表現（1）ア，イ」と「A表現（2）ア，イ」，また「B鑑賞（1）ア」のバランスや，「〔共通事項〕（1）ア，イ」の視点から，指導計画や内容，方法を検討し，目標の設定や具体的な指導と評価を考えることにも留意していきたい。また，R P D C Aサイクルを意識し，題材を行う順序や幅のある時数の増減といった，図画工作科ならではの柔軟性を生かしながら，成果や課題を次の実践に着実に生かしていくことができるようにする。

(2) 「どのように学ぶか」…主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

(アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善)

主体的・対話的で深い学びを授業改善のキーワードとして捉え、以下の観点から研究に取り組む。

○ 主体的・対話的で深い学び

児童の表現欲求に応える必要性のある題材を設定することや、学習の見通しを立てられるようにするなど、児童自らが表現や鑑賞の活動に取り組んでいけるように授業づくりを行う。例えば、表現材料を児童に探し集めさせることも、資質・能力を高めさせることになる。また、身近な材料を活用する題材や、児童が思う存分に造形活動に取り組める場所を用意する。これらのことから、主体的に取り組もうとする意欲の高まりとともに造形活動の充実が期待できる。鑑賞では、普段よく目にしている形や色のよさや美しさを再認識する具体的な方法を考え、造形的な見方ができるように授業を改善することで主体的な活動になる。主体的に「つくり、つくりかえ、つくる」という学習過程を通して、児童は豊かに発想・構想をし、その発想・構想したことを基に技能を発揮し、表現を行う。そしてその表現からまた新たな発想をして表現し続ける。この繰り返しのなかで、深い学びを体得していく。そのため、発想や構想の段階での指導のあり方をより一層重視したい。

「造形的な見方・考え方」ができるよう、授業の中に話し合うなどの対話を位置付ける。その際、形や色などの造形的な視点から、自分の考えなどを広げたり深めたりできるよう留意する。「この形や色でよいか」、「自分の表したいことをどのように表しているか」など、児童がまず自分の表現を振り返り、感じたり、考えたり（自己内対話）できるようにする。そして、互いの活動や作品を見せ合いながら考えたことを伝え合ったり、思ったことを話し合ったりするなど、友達に話したくなる、伝え合いたくなる場面を設定する。これらの活動を通して、児童に自分の成長やよさ、可能性などに気付かせ、深い学びへとつなげられるようにする。さらに、教師との対話、児童同士の対話だけでなく、保護者や地域、社会の人と交流する機会を設定することができれば、児童はより広く、より深く考えていくことが可能になると考える。

○ 造形遊びの充実

造形遊びは児童が材料などに進んで働きかけ、自分の感覚や行為を通して捉えた形や色などからイメージをもち、思いのままに発想や構想を繰り返し、技能を働かせて表現する活動である。造形遊びは、児童が表現する過程そのものを楽しむ中で「つくり、つくりかえ、つくる」という学びの過程を経験できる重要な活動である。友達とかかわり合いながら活動することが主になる造形遊びでは、主体的・対話的な学びが展開しやすいだけでなく、既習の経験や技能を生かして、新しい試みや価値を生み出すことができるので、深い学びにつなげていくこともできる。今一度、造形遊びの価値を確認し、どの学年でもそれぞれの発達の特性に合った授業を実施する。

(3) 「何ができるようになるか」…表現する喜びの自覚・共有につながる評価の工夫

新学習指導要領において、教科の目標及び内容が、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で示されたことを踏まえ、評価の観点が「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」に整理された。児童一人一人が表現及び鑑賞活動の中で、どのような力を発揮しているのかを具体的な児童の姿から見取る必要がある。その中で児童のよさを認め、表現及び鑑賞の活動への自信と楽しさ、喜びを味わわせ、更なる活動への意欲をもたせたい。

完成された作品だけでなく、その過程に目を向け、育成を目指す資質・能力の発揮状況を適切に評価し、共感と支援を通して、児童一人一人の造形活動への意欲、資質や能力を高める指導につなげていくことが重要となる。活動中の姿を評価することは、表現の意図を理解することにつながり、指導（支援）する時の手がかりとなる。指導と評価は常に一体となっていることを認識しておく。

また、児童自身が自らの学びを振り返って次の学びへ向かうことができるように、自他の作品や取組・行為のよさについて記述したり、話し合ったりする自己評価や相互評価等を用いた場を設定し、自らの表現ができた喜びを自覚できるようにしていくことも大切である。個々の活動が多様かつ同時進行していく教科の特性から、ポートフォリオ、デジタル記録やワークシートなど多様な評価方法を組み合わせて活用し、指導改善、学習改善につながる評価を行う。

5 研究方法

(1) 本年度は研究大会の会場校である小松島市児安小学校を中心とする研究組織をつくり研究計画を立てる。また、発表担当の各郡市の研究組織と協働しながら事前研究や授業実践を行い研究内容の解明を図る。

小松島市児安小学校では、3公開授業を実施する。

【部会別テーマ】

造形遊びをする活動部会	<p>○「思考力、判断力、表現力等」 造形遊びをする活動を通して、造形的な活動を思い付くことや、どのように活動するかについて考えることができるようにするにはどうすればよいか。</p> <p>○「技能」 造形遊びをする活動を通して、活動を工夫してつくることができるようにするにはどうすればよいか。</p>
絵や立体、工作に表す活動部会	<p>○「思考力、判断力、表現力等」 絵や立体、工作に表す活動を通して、表したいことを見付けることや、どのように表すかについて考えることができるようにするにはどうすればよいか。</p> <p>○「技能」 絵や立体、工作に表す活動を通して、表し方を工夫して表すことができるようにするにはどうすればよいか。</p>
鑑賞活動部会	<p>○「思考力、判断力、表現力等」 鑑賞する活動を通して、造形的な魅力や造形的な表現の内容、方法、意図や特徴、表し方の変化などについて感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を広げたり深めたりするにはどうすればよいか。</p>

※上記に加えて、〔共通事項〕(1)アは形や色などに関する「知識」、(1)イは自分のイメージに関する「思考力、判断力、表現力等」として、「A表現」及び「B鑑賞」の全活動を通して育成するものであるため、すべての部会に関連付ける必要がある。

(2) 各郡市研究会は、研究主題の解明に向けて共通理解を図り、研究や授業実践を行う。

(3) 研究成果をまとめ、研究集録（第57集）を発刊する。

参考文献：「小学校学習指導要領図画工作編（平成29年6月）」文部科学省

「平成29年度版 小学校新学習指導要領 ポイント総整理 図画工作」

阿部宏行 東洋館出版社 2017

「初等教育資料2018年8月号・2019年9月号」 東洋館出版社